

プロテスタンティズムと世俗化社会との関係への一考察

森喜啓一

はじめに

本研究ノートは、博士課程論文「ピーター・バーガー研究:現代の世俗化とプロテスタンティズム」のために基礎研究としてマックス・ヴェーバーの著書『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を研究ノートとしてまとめたものである。このヴェーバーの著書は、1920年に出版されて以来、多くの論議を呼んできたが、プロテスタンティズムが新興の近代資本主義の成長を如何に支えていたかを論ずるうえでは神学、社会学、経済学にとって重要な示唆を与えるものであった。またこの著書は、現代とは時代背景的な隔りがある17世紀のイングランドのプロテスタンティズムがテーマになっているもののバーガーが論じる現代のプロテスタンティズムと社会との関係を考察する上では、現在でも重要な手掛かりの一つになると考えられる。

ヴェーバーは『プロテスタンティズムの倫理と資本主義精神』の中で、ピューリタニズムの倫理とイギリスの近代資本主義の精神に存在する親和性を巡って論議を進めており、本ノートもその両者の親和性を検証するための論議としてすすめることとしたい。

1. 資本主義の精神

ヴェーバーの示唆する資本主義とは、近代資本主義である。近代資本主義は、それまでの商業資本主義とは大きな隔りがあった。商業資本主義は、東インド会社のように複数の植民地と本国間の三角貿易によって利益を得ることを生業とするため、政府との結び付きが強く、資本は船などの流通のためのものが主であり、労働も奴隷や強制的なものが多かった。しかし、ヴェーバーの分析する近代資本主義では、組織的には事業経営者と労働者という区分が存在した。投資家は、企業の生産と生産物の取引に対して資本を投下し、投資に対する利益を得る。また投資家と経営者は、自らが投資または経営すその利益を、事業と利益拡大のための再投資用に留保しなければならない。その一方では、生産や流通を担う労働者は、経営者に賃金によって雇用されるのが原則となる。労働者は自分が得る賃

金の対価として労働を提供し、労働者が得る賃金は、熟練度や、労働への態度、労働市場との需給関係で決定されるのが一般的である。しかしながら、17 世期イングランドでは、労働供給過多の状態にあり、労働者市場は経営者ら雇用者による買い手市場であったため、労働者は「どれだけ一生懸命働くか」という勤労精神の最大化が彼らの雇用と賃金の決め手となった。また、労働者は、労働で得た賃金を生産財市場で物品やサービスの購入の為に使われることが重要で、そこで使われた賃金は生産者の利潤や費用として還元され、投資家はその還元された利潤の中から自分の投資分に見合う利益を得るという経済的循環があった。

『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』でヴェーバーが論じた資本主義精神とは、誠実、勤労、儉約そして敬虔なピューリタンの精神性に支えられたものであった。ピューリタンは、カルビニズムを踏襲し、清教徒革命を勝ち抜いてきたピューリタニズムは、現代の感覚から考えれば、信仰のもとに非常に厳しい自己統制下にあったということが出来るであろう。彼らは、一部は無産者、一部は小資本家層であり、貴族的な大商人や金貸＝冒険商人と対立する小資本家層として成長し、西洋の資本主義に特徴的な工業労働者の市民経済的組織を生んだのである。<sup>1</sup>この近代資本主義の精神は、新たに努力し向上し新しい産業を生み出した中産階級として出現した彼らによって始められ、雇用労働者も同じ精神のもとにあり、近代資本主義の担い手となったのである。

ヴェーバーは、彼らが合理的で誠実に勤労する旺盛な事業家精神を持ち、また再投資資金準備のため儉約をすることが重要であったとしている。合理的とは、利益を追求しても、その利益は神から与えられたものであり、無駄にせず、神の前で誠実に管理することと理解できる。したがって、その利益を得るために為す労働は、神から与えられた天職であり、天職は勤勉に働いて果たし、その利益は無駄をせず儉約に努めなければならないとしていた。

ヴェーバーは、上記のことをドイツの大商人ヤーコブ・フッガー<sup>2</sup>とアメリカのベンジャミン・フランクリン<sup>3</sup>を例に挙げて中世的資本家と近代資本家の精神性の違いを説明している。中世的な大商人であるフッガーは、道徳に無関心で可能な限り儲けることに執着した者であった。これに対してフランクリンは、「正直は信用を生むから有益だ、時間の正確や勤勉・節約もそうだ、だからそれらは善徳だ、というふうに功利的な傾向と倫理的な色彩を持つ生活の原則を尊ぶ性格をおびている」<sup>4</sup>のである。この功利的とは、合理的と理解でき、フランクリンは、神がフランクリン本人をしてそうなさしめていると信じたのである。さらに、この功利的生活では、享楽や快樂を厳しく慎み、勤勉儉約に努めて、倫理的最高善を求めなければならなかった。なぜならば、その職業が資本家であっても、雇用された労働者であっても同様の精神が神への信仰の現れてとして自らに課したのである。そ

の精神における勤労への熱心さは、長時間労働や低賃金といった労働上の問題は考慮せず、神に対する使命を果敢に果す事が、救いを確かなものにする証明として彼ら自身に投げかけられ続けたのである。

## 2. ピューリタニズムの教理

ピューリタンとは、イングランドにおけるプロテスタンティズム運動に共鳴しその思想に従った人々を指すものである。イングランド独自の政治風土と歴史の中で改革派の流れを汲みながらも、ピューリタニズムと呼ばれる教理を形成していった。ピューリタニズムは、16世紀に既に、トマス・カートライトによってイングランドで提唱されていた。このピューリタニズムは、17世紀には、改革派の教理教義を踏襲した、リチャード・バクスターやジョン・オウエンらにより引き継がれ、国家の介入を拒否するイングランド国教会分離派として独立精神旺盛にキリスト教運動を展開し、清教徒革命の勝利によって、教会と国家の分離を果たすなどの世的文化理念を徐々に克服していった。ピューリタンには、反国教派の市民的中産階級、下層地主層、独立自営農民らの支持が多かった。しかし、1688年から1689年の名誉革命により、イギリス議会の権限が大幅に増し、イギリス国教会が正式なイギリス国家教会とされたため、ピューリタンは、会衆派、長老派、メソジスト、メノナイト、クエーカーなどの分派としてその精神を受けつぎ18世紀にはその働き場をアメリカに移してくことになる。

このようなピューリタンの独自の歴史的過程を得る中で、彼らは改革派の思想を継承しつつも、彼らの政治体制や教会体制に対する改革運動を通して、神の恩恵に対する人間の主体的応答を強く求めるようになっていた。この変容の一つには、ピューリタンの中の分離派の指導者であったロバート・ブランウン<sup>5</sup>らによって「神学構造の中心に契約神学」<sup>6</sup>を据えたことが挙げられる。契約神学思想は、改革派の中にも存在していたが客観的な神の約束という片務的契約思想であった。一方、ピューリタンでは神の恩寵に対する人間側の積極的な応答と決断と行為という「契約(covenant)と条件(condition)が同義語として並列している。契約とは神と人間の両側の条件的結合である。この条件的結合が、契約の人的パートナー(信者の集まりとしての教会)に《規律》の徹底を要求する<sup>7</sup>双務的契約<sup>8</sup>が要求されるのである。それは、以下に述べるような、ピューリタンの予定説に対する行為や厳格な世俗内禁欲主義は、予定説における神の選びの確信のための人間側の積極的な神への応答と行為を促す重要な背景となっていたのである。

## 2-1. 予定説

「恩恵による選び」<sup>9</sup>は、ピューリタニズムの支柱となる教理であるが、ピューリタン信徒は困難をもってその教理を受け入れなければならなかった。ピューリタンの恩恵による選びは、一般に二重予定説と言われるものである。カルビニズムの中で最も特徴的な教義とされ、キリスト教綱要第3編21章から24章で明確に規定された教説である。21章の冒頭には、「神が、ある者を救いに、ある者を滅びに予定したもうた永遠の選び」<sup>10</sup>と記され、以下でその正当性を聖書とアウグスティヌスの教説を使って論じている。さらにその24章では「選びは神の召によって確認されるが、遺棄された者は定められた正当な滅びを自らに引き寄せる」<sup>11</sup>という冒頭で始められている。カルヴァンは、救いに選ばれる者は、神の意思によるものだが、神に選ばれず滅んでいく者は自らの滅びへの所業によって神に見捨てられ滅んでいくのであり、神の絶対的な権能と主権が、人間の生の全てを予め定めていることを強調している。この教説は、「神は当初から救う者と救われる者を選別されている」<sup>12</sup>即ち、ルターのように「信仰あるものは救われる」という救済論を裏付ける単純な予定説とは異なり、終末論的色彩の中で神意により救われる者と見捨てられる者の選別に至るといふ、非常に強迫的な色彩が濃いところに特徴がある。この二重予定説で、困難な問題となるのは、「誰が救済される者として選別されているのだろうか」ということである。そして「神に見捨てられる者とはどのような者であるか」についての言及も具体的になされておらず、全てが神の御心によるのであるということであった。

この二重予定説がピューリタンにとって最も切実な問題をヴェーバーは次のように述べている。「地上のあらゆる利害関係よりも来世の方が重要であるばかりか、むしろ様々な点で一層確実とさえ考えられていた時代において、そうした教説は人々にはどんなに耐え忍んでいっただろうか。かならずや信徒の一人びとひとりの胸には、私はいったい選ばれているのか、私はどうしたらこの選びの確かさが得られるのか、というような疑問がすぐさま生じてきて、他の一切の利害関係を背後に押しやってしまったにちがいない」<sup>13</sup>。特に、上述のように、神との双務的契約にあるピューリタンにとって、救いに選ばれないことは、契約義務を果たしていないと神が見定めたことになるため、神に選ばれないことと同時に、自分の信仰の義務を果たしていないという両面で深刻な内面的苦悩に陥らざるを得なかったのである。彼らの心理状態は「厳しい自己批判の遂行があり、自己欺瞞とのたたかいがあるのである。この内面化は気分的なものではなく倫理的なもの」<sup>14</sup>だったのである。救いに選ばれないかも知れないことへの恐怖心を正面から捉え、内面的な戦いを克服しようとする彼らの信仰心は、確かな救いのために、倫理的誠実さ、厳格さ、高潔さ、勤勉さが生活と労働の全を支配しようとしていたのである。

## 2-2. 行為義認

ルターが信仰義認論を標榜するのに対し、カルヴァンは信仰義認と共に行為義認論を同格に採用していた。パウロがテサロニケの信徒への手紙二 3 章 10 節で述べた「実際、あなたがたのもとにいたとき、わたしたちは、『働きたくない者は、食べてはならない』と命じていました。」という命題は誰に対してでも当てはまるのである。ヴェーバーが指摘するように、行為もまた重要な信仰倫理上の要素なのである。ルター派は、ルター自身の宗教体験に基づいた神と人との「神秘的合一」<sup>15</sup>を目指す神秘主義的な傾向を持っていた。彼らの神秘的合一への願望は、原罪の意識と結びつき信徒たちに悔い改めに根ざした謙遜な態度を育てた。これに対して、改革派は、そのような神秘主義を強く否定し、信徒が神の前で具体的に実践する行為により、神からの恩恵として信仰があたえられるのである。さらに神から与えられた信仰によって人々がなす行為は、神の働きかけにより行われる正しい行為であると信じられた。<sup>16</sup>すなわち信仰に裏付けられた行為は、神から働きかけられたものであるから積極的に行えというのである。このように改革派は、信仰義認と行為義認を表裏一体のものとしていた。従って「神は信仰と善行を同時に見ている」のである。しかし、現実的には、神の恩恵の選びの教理の脅威による耐えがたい苦悶に喘ぐピューリタンは、誰もが「自分は選ばれているのだ」という強い確信を持つために、厳格な倫理的な生活と勤労に励む行為に熱心であろうとしたのである。

## 2-3. ピューリタンの倫理的禁欲生活

世俗内禁欲生活という言葉は、修道士の（世俗外）禁欲生活に源を発し、修道士著述家によって発達させられたもので、これこそが後にプロテスタンティズムのもっぱら世俗内的な『禁欲』の中で完全な発達を見ることになるエートスの萌芽<sup>17</sup>である。ヴェーバーがこう示すように、市井の人々がこの世俗内での禁欲的な営みもまた修道士と同等に聖なるものとされることは革新的な宗教的思想だった。そして、この世俗内禁欲主義は、前述のピューリタニズムの双務的契約概念のもとでの二重予定説を克服するために必要不可欠な信仰と倫理的な生活概念であった。それは、以下に述べるように、日常の生活もさることながら、職業を神への奉仕の一環として天職として捉えることにも重大な意味を成していた。

### 2-3-1. 天職

厳格な勤勉さとは、自分の仕事を神に与えられた天職として信仰をもって励むことであ

る。それはヴェーバーが「あたかも労働が絶対的な自己目的、すなわち Beruf『天職』であるかのように励む心情が一般に必要なからである」<sup>18</sup>と述べるように、世俗内での労働は、どのような労働であっても、神からの恩恵としての「天職」とすることで、信仰と勤労の精神が合致するのである。しかし、この当時はこうした心情がまだ一般的ではなかった。中世的な世界では、労働は聖職者や貴族階級にとっては概ね卑しい営みとされていた。また、職人も他の市民にも、勤労という思想は存在せず、その日の食べもののため、その日暮らしのために、窮乏した時にだけ必要最小限の労働をおこなうことに留まっていた。従って生産性は高くなかった。マタイによる福音書に登場する「ぶどう園の労働者の喩え」はそのことをよく表している。ぶどう園の主人は、労働者があまり熱心に働かないことを知っていたのである。夕方になって雇われた労働者は、ようやく夕方になって雇用されたという恩と、その日の暮らしのための金を限られた時間で稼ぐ為に熱心に働いたのである。従って、ピューリタンの天職の理念は、この時代には画期的なものであったと考えられ Beruf という言葉についてヴェーバーは、「むしろそれが持つ意味合いは聖書の翻訳に由来しており、それも原文の精神ではなく、翻訳者の精神に由来している」<sup>19</sup>と述べ、ルターが聖書のドイツ語翻訳をおこなった際にベン・シラの知恵 11 章 20 節、21 節にある” ברוף “を本来は「遣わす」意味するところを「天職」すなわち神から与えられた使命という意味での翻訳に置き換えたのである。これは、ルターの職業観が反映されたもので、職業が神の摂理により授かったものである限り、それを成し遂げるための誠実さと、自分を忘れるほどの労働に「打ち込む」勤勉さが求められたのである。改革派は Beruf を、「その職業の内部において神の栄光のために働くということに尽くされている」<sup>20</sup>と解釈し、ルターよりもさらに踏み込んだ神の為の働きと定めていた。ピューリタンにとっての Beruf は、「天職」として、経営者であっても、職人出会っても、神の選びに与るために労働の種類にかかわらず勤労することの裏付けが明確にされたのである。また、職業を天職として特化することは功利主義的な効用をもたらす。練性と専門性が向上し労働の量と質も向上することが期待できるのである。現在のプロフェッショナリズムの概念の基がここにあるのだ。また、このことは公共の福祉の促進ができるものと考えられた。しかし、一方で、「天職」を持たないものは、ピューリタニズムが組織的に要求する世俗内禁欲主義を満たさない欠格者とみなされていた。

### 2-3-2. 利益の間

職業の実践的有益性にとって私経済的「収益性」は、現在と同様に、最も重要な要素だった<sup>21</sup>とヴェーバーは述べている。倫理的基準や生産財の重要度に加え、非常に重要な

職業の指標でもあったと考えられる。ピューリタンは、神が信仰の深い者には利益を得る機会をも与えられるのであり、この機会を天職の召命として神に応じなければならないのである。従って、ピューリタンでは、信仰における「天職」で得た利益は神の意に沿ったものとして承認されたのである。カトリシズムが、投資や融資に対して加算する利子を神の意に反するものとして禁止していたこととは極めて対照的であり、改革派の現実的な現世主義の一端がここに顕れている。ヴェーバーは「確定した職業の持つ禁欲的意義の強調が、近代の専門人に倫理的な光輝をあたえよう、利潤獲得の機会を摂理として説明することは、実業家に倫理的な光輝を与える」<sup>22</sup>としている。禁欲主義をとる市民であるピューリタンが、自助努力によって得た利益は、倫理的な努力の結果として称賛されたのである。「神は彼の営み（トレド）を祝福したもう、というのが、こうした神の導きに従って成功した聖徒たちに用いられる常套的な語法だった」<sup>23</sup>。

しかしながら、ピューリタニズムの合理性は、利益の獲得を、贅沢や怠惰な休息や享楽を得る為のものに向けようとする安易な意識を危険視した。それらは非合理的であり墮落であり、ピューリタニズムの倫理的禁欲主義からは著しく逸脱する行為として糾弾されなければならないのであったのである。このように、ピューリタンは、どれだけ稼いでも、その稼ぎは信仰の証として称賛されるけれども、ピューリタンは慎ましく暮らし実直に勤労を果たし、その利益は蓄積されるのである。

### 3. カトリシズムの中世的呪術からの離脱

カトリシズムに代表される伝統主義という前近代的な精神からは、近代資本主義精神は生まれなかった。プロテスタンティズムは、キリスト教精神の基となった唯一神ヤハウエだけへの信仰に生きたユダヤ教と聖書の精神に立ち戻り、宗教的な合理性と知恵を獲得したのである。そしてピューリタニズムもまた、中世のカトリシズムが伝統とした呪術からキリスト教世界を離脱させ、倫理的にして宗教的な合理性と知恵によって自らの倫理性を確立し、近代資本主義を「倫理的にして宗教合理主義的な生活観察」<sup>24</sup>へと傾かせるのである。

プロテスタンティズムの多くは、ローマ・カトリック教会が伝統としておこなってきた7つの聖礼典、洗礼、堅信、聖餐、按手、懺悔、塗油、結婚のうち、聖餐と按手だけを教会に残し、残りの5つの聖礼典を全て廃止した。その理由は、それら廃止したものが、聖書に沿っておらず、カトリシズムが人間の主観に訴えるために人が作り上げ、伝統的に行ってきた呪詛的儀式に過ぎないからであった。ヴェーバーは「キリストが死にたもうたのもただ選ばれた者だけのためであり、彼らのために神は永遠の昔からキリストの贖罪の死を

定めたもうたのだ」<sup>25</sup>というカルヴァンの言葉を引用し、改革派のみならずプロテスタンティズムが、世界をカトリシズムの呪術から解放するために「救いのためのあらゆる呪術的方法を邪悪な迷信として排斥した」<sup>26</sup>のである。これには、聖礼典の他にも、「聖伝」と呼ばれるカトリック教会の伝統を教える書物や、聖人像、聖画なども廃止された。これらはすべて、プロテスタンティズムの「聖書のみ」の教理と、この教理の基となった旧約聖書の「十戒」にある偶像崇拜禁止項目<sup>27</sup>に従った合理的な決定であった。聖書にそぐわない、儀式や書物もまた偶像礼拝なのである。

#### 4. 古代ユダヤ教の合理性の採用

ピューリタンの世俗内の倫理的禁欲生活には、「たえず基準としうるような確固たる規範が必要だったが、今やそうした規範はいうまでもなく聖書から与えられることになった」<sup>28</sup>と、ヴェーバーは述べ、この聖書至上主義についての研究上の重要点として「旧約聖書は新約聖書と同じように聖霊によって記されたものだから、その道德命令も、明らかにユダヤ教の歴史的事情のために定められたか、キリストによって明瞭に廃棄されたものを除いては、すべて同一の権威を持つと考えられた」<sup>29</sup>。そこには、やはり古代ユダヤ教に流れる宗教的合理性が見出されたからに他ならなかったのである。旧約聖書の権威は、ユダヤ教の合理主義にも依拠しているのである。古代ユダヤ教の周辺や、ユダヤ人の中の、呪詛的なものを完全に消滅させることは容易でなかった<sup>30</sup>。「律法の教師達はそれらの呪術性と組織的な闘争を行っていた」<sup>31</sup>。その律法の教師達の闘争史は、旧約聖書全体を貫き、唯一神ヤハウェの言葉と行為により古ユダヤ教の宗教的合理主義を徹底させていこうとしていたのである。

創世記第2章～3章にあるアダムとエバの楽園物語の中で、蛇がエバに禁断の木の実を食べよう誘惑する場面では、創世記4章5節での蛇の台詞にその合理性が明確に記されている。蛇は「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ（創世記3章4節）」とエバに言うのである。アダムとエバは結局その実を食べてしまうのだが、それは、ヤハウェが、神の善悪を見分ける知恵を人間に与え、合理的な生き方をするようにさせたことを示唆しているのである。また、「お前は汗を流してパンを得る。土に帰るときまで（創世記3章19節）」と、汗を流して死ぬまで勤労することを、人間に命じられたのである。人の勤労の精神がここにはじまったのである。

旧約聖書における知恵とは、神と人間との間にある世界を支配する基本的秩序や、個別のかつ多様な秩序的諸関係、即ちそこにある宗教的合理性を教えることにある。箴言やコヘレトの手紙、ヨブ記などの知恵文学の教えがそれにあたる。知恵文学の多くは、ソロモ

ン王国の時代から、イスラエルが滅亡し、バビロンの捕囚が行われた期間に記述されたとされている。イスラエルの傲慢さや背信による混乱と危機の中で迫られる本質的な変化を、それぞれの記者が宗教倫理的に応答した記述であるところに特徴がある。一度は滅びたイスラエルを復興させるという新たな時代にむけた新たな合理的秩序への示唆が述べられているのである。

また、ヤハウエとノア、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約関係や、出エジプト記における十戒、レビ記、民数記、申命記に記された律法も、約束事や秩序が規定されてきたことは、旧約聖書における顕著な宗教的合理性といえることができるであろう。ヴェーバーは、「総じて旧約聖書の中では、呪術ではなく神の奇跡が中心であり、この奇跡は神のはっきりとした意思に基づき理解可能であるもろもろの意図や反作用から生ずるという見解が、イスラエルでは、著しく支配的であったのである。……この呪術の欠如は、出来事、運命宿命の理由を求めるあらゆる疑問を、摂理信仰の道へと押し促した」<sup>32</sup>と述べ摂理信仰という神の合理性が人間を支配していること明らかにしている。

ピューリタンにとり、現世で富を蓄積することは、神の啓示として命ぜられたことであり、聖俗内禁欲的宗教的倫理の中の重要な要素であると考えられる。ヨブ記では、ヤハウエに愛され祝福されていたヨブはその地方一番の資産家であった。ヴェーバーは、ヨブ記においては、神の祝福は現世の生活における物質的富として物語の始まりと終わりで強調されていることは、カルヴァンには付随的な事象だがピューリタンにとっては重要な確信として強い影響を与える<sup>33</sup>と指摘している。またこのことは、ヨブ記にとどまることなく、アブラハムが、ヤハウエから「わたしは、あなたをますます繁栄させ、諸国民の父とする（創世記 17 章 6 節）」またヤコブは、神に導かれるまま、母の兄のところへ寄留するが、知恵により多くの財産を築いて帰郷する。その息子、ヨセフは、夢を読み解く力を与えられたことで、エジプトの大臣にまで出世をするのである。これらの物語も、神の祝福により現世で豊かになるという、ピューリタニズムにとって現世での神に祝福された天職の勤労に対する恩恵としての富の取得の合理性を承認するものではないだろうか。

## 5. 結論

このように、マックス・ヴェーバーが述べるピューリタニズムの倫理と近代資本主義の精神の親和性を演繹的に論じることを試みた。ピューリタンが活発だった時代は、倫理や価値観が、中世的伝統に守られてきたものから、近代の新規性に富むものへと変容しようとしていた時期であった。時代が変わり、経済や社会理念が変わり、キリスト教信仰のあり方も中世的伝統を廃棄して本格的に新しい思想へと変化せねばならなかった。特にイング

ランドでは、近代資本主義体制に入るのが他国よりも早かった。その背景には、次のような条件がイングランドに有利に働いたと考えられる。第一に、イングランドが商業資本主義により、三角貿易などで巨万の富をえた冒険主義的豪商や富農者の資本の蓄積があること。第二に、金融システムが発達していたこと。農業革命により地方の農村から都市に仕事を求めて多くの労働力が流入してきたこと。第三に、既に多くの植民地を保有しており、多くの原材料や市場を獲得していたこと。そして、第四に、科学・技術が進歩していたことである。それと同時にこれらの原資を有効に活かすことのできる野心に満ちた新しいタイプの勤勉な中小企業家が登場し、豪商や金融機関から融資を受け、羊毛や石炭などの豊富な資源やエネルギーを手に入れ、都市に流入してきた豊富な労働力を使って産業を興していったのである。そのような中小起業家を精神的に駆り立てたものが、ピューリタニズムの勤労と利益の拡大への野心を支える宗教的合理的性と倫理性であった。それはヴェーバーが指摘するように、そこに古プロテスタンティズムの精神の純粋に宗教的な諸特徴と近代資本主義文化との間に内面的な親和性があったと考えられるのである。

## 6. 今後の研究について

18世紀に入ると、名誉革命のもとに統合されたイギリスは、大産業国家となる。また、ピューリタニズムの倫理と近代資本主義の精神は、ヴェーバーが本著書では指摘しなかったが、ピューリタン達が重要な精神構造一部とした「自由」を求めて、アメリカに舞台を移しアメリカを巨大な近代資本主義国家へと導くのである。18世紀以降、即ち、近代以降、キリスト教世界の社会は、宗教から自立した世俗化へと向かいつつ現代に至っている。

しかし、この世俗化という現象は、本当にキリスト教、特にプロテスタンティズムから自立したのであるか。いまだに、プロテスタンティズムは、神が前進させる時代と共に変容し、精神的下部構造とその時代の人間や社会を支えているのではないだろうか。ピーター・L・バーガーはその著書『聖なる天蓋』<sup>34</sup>で、このプロテスタンティズムと世俗化の歴史的結びつきに同意すると同時に、現代社会がプロテスタンティズムによって歴史的に表出された状態であることを読み取っている。

そこで仮説的に想定できることは、プロテスタンティズムが、福音と言う基本的伝統的教理は堅持しつつも、時代とともに進歩し、世俗化社会の下部構造に内在化することによって、社会を改革進歩させ、その社会変化が、プロテスタンティズムの上部構造を変化進歩させると言う相関的な関係にあるとすることができるかも知れない。これらのことは、ヴェーバーの論考をもとに行う研究によって明らかにしていきたい。

## 参考文献

梅津順一『ヴェーバーとピューリタニズム』新教出版社、2010年。

大木英夫『ピューリタニズムの倫理思想』新教出版社、1966年、128頁。

大木英夫『ピューリタン』中公新書、1968年。

金井新二『ウェーバーの宗教理論』東京大学出版会、1991年。

ジャン・カルヴァン著、渡辺信夫訳『キリスト教綱要3編』新教出版社、2008年、425-503頁。

ピーター・L・バーガー著、藺田稔訳『聖なる天蓋』ちくま学芸文庫、2018年。

マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1989年。

マックス・ヴェーバー著、武藤一雄、藺田宗人、藺田担訳『宗教社会学』創文社、1976年。

マックス・ヴェーバー著、内田芳明訳『古代ユダヤ教(中)』岩波書店、1996年。

マックス・ヴェーバー著、世良晃志朗訳『支配の社会学II』創文社、1962年。

ジェームズ・パッカード著、松谷芳明訳『ピューリタン神学総説』一麦出版、2011年。

『聖書 新共同訳』日本聖書協会、2010年。

*Luther-Übersetzung Bibeltext der revidierten Fassung von 1984*, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1999.

---

<sup>1</sup> マックス・ヴェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店、1989、353頁。

<sup>2</sup> *ibid.*, pp. 44-45.

<sup>3</sup> *ibid.*, p. 43.

<sup>4</sup> *ibid.*, p. 46.

<sup>5</sup> Robert Brown (1550-1633): イングランド分離派の指導者の一人であり、やがて会衆派を組織する。

<sup>6</sup> 大木英夫『ピューリタニズムの倫理思想』新教出版社、1966年、109頁。

<sup>7</sup> 同書、109頁。

<sup>8</sup> 両務的契約：新約聖書と旧約聖書を旧約聖書申命記7章12節「あなたたちが、この法に聞き従い、それを忠実に守るならば、あなたの神、主は先祖に誓われた契約を守り、慈しみを注いで、あなたを愛し、祝福して数を増やしてくださる」の言葉が、そのままこのピューリタンの神理解と教理の成立を促したのではないかと考えられる。

<sup>9</sup> 同書、144頁。

<sup>10</sup> ジャン・カルヴィン著、渡辺信夫訳『キリスト教綱要第3篇』新教出版社、2008年、

---

425-503 頁。

- 1<sup>1</sup> 同書。
- 1<sup>2</sup> 同書、276 頁。
- 1<sup>3</sup> ヴェーバー、前掲書、1989 年、172 頁。
- 1<sup>4</sup> 大木英夫『ピューリタニズムの倫理思想』新教出版社、1966 年、128 頁。
- 1<sup>5</sup> ヴェーバー、前掲書、1989 年、182 頁。
- 1<sup>6</sup> 同書、183 頁。
- 1<sup>7</sup> 同書、59 頁。
- 1<sup>8</sup> 同書、67 頁。
- 1<sup>9</sup> 同書、95 頁。
- 2<sup>0</sup> マックス・ヴェーバー著、世良晃志朗訳『支配の社会学Ⅱ』創文社、1962 年、632 頁。
- 2<sup>1</sup> 同書、310 頁。
- 2<sup>2</sup> 同書、317 頁。
- 2<sup>3</sup> 同書、318 頁。
- 2<sup>4</sup> マックス・ヴェーバー著、武藤一雄、菌田宗人、菌田坦訳『宗教社会学』、創文社、1976 年、129 頁。
- 2<sup>5</sup> 同書、157 頁。
- 2<sup>6</sup> 同書、156 頁。
- 2<sup>7</sup> 「あなたはいかなる偶像も作ってはならない（出エジプト 20 章 4 節）」
- 2<sup>8</sup> 同書、211 頁。
- 2<sup>9</sup> 同書、212 頁。
- 3<sup>0</sup> 出エジプト記 32 章に記されている、モーセがシナイ山で神と語っている間に、モーセの弟アロンとイスラエルの民が金の子牛像を造る物語に、容易に消すことのできないイスラエルの呪詛的意識が見受けられる。
- 3<sup>1</sup> マックス・ヴェーバー著、内田芳明訳『古代ユダヤ教（中）』岩波書店、1996 年、536 頁。
- 3<sup>2</sup> 同書、545 頁。
- 3<sup>3</sup> 同書、319 頁。
- 3<sup>4</sup> ピーター・L・バーガー著、菌田稔訳『聖なる天蓋』ちくま学芸文庫、2018 年。